広島大学，広島の重みを胸に

1998年の秋，鹿児島から広島に転職した際に，そこの大学の長から「広島に行ったらあなたにとって良いことがあるだろう」と言われたことがある。「島から島へ」の移動だけではという軽い気持ちでいたのでピンと来なかった。いま振り返ってみると，確かに「良いこと」もあったろうが，それは私にとってのターニングポイントと言えるかも知れない。

教員としては，優秀な学生に囲まれるのが何よりも幸せなことである。様々な分野に関心を示す学部生や実務経験，生活経験が豊かな社会人大学院生，或いは学習意欲の高い外国人留学生に出会って，どれだけ刺激を受けていたかは計り知れない。言うまでもなく，講義や研究指導を行う中で触発されたことが，常に研究を展開していくきっかけとなっていた。昨春，スタンフォード大学で開催された学会で，大阪大学の准教授を務める教え子と会ったが，学部時代の彼女からの鋭い質問は今も記憶に残っている。

健全な組織にいると，構成員も健全になるはずだ。多様な研究分野の教員同僚に恵まれ，切磋琢磨とまで言わなくとも，それぞれの研究手法や問題意識からヒントを得ることが多い。社会心理学を専門とするかつての同僚が居酒屋で何気なく口にした，「一年間で９回学会発表した」という発言を耳にすると，「よし，負けないぞ」という気持ちが自然と生まれる。そういった仲間はよきライバルでも伴走者でもあって，尊敬に値する。組織運営にあたっては，職員同僚から支援を受けなければならない。学内の規定，規則を熟知し貫こうとしつつも，臨機応変に対応してくれる。その柔軟さ，洗練された手法は見習いたいと思う瞬間も多々あった。広大ファミリーのメンバーとして，自信が持てる。誇りにも思う。

ところで，世界に出て，「広島大学から来た」と自己紹介をすると広島のことについてあれやこれやと聞かれる。ダブリンでもウィーンでもそうだし，地球の裏から北京に集まった華僑，華人からは，「広島は草が生えているか」とまで訊ねられた。広島あっての広島大学だなとしみじみ感じさせる。広島は，軍都の広島，被爆地の広島，国際平和都市の広島と，百数十年の近現代史の道を歩んできた。歴史的にあまりにも重い広島の中の広島大学だからこそ，一種の重みを背負っている。自負と自信を持てる広島大学構成員の我々としては，その重みを自覚し，その重みを胸に，それぞれの仕事をこなし，それぞれの暮らしを営んでいこうではないか。

（本稿は，2023年10月20日にＡＮＡクラウンプラザホテル広島で開催された，令和５年度広楓会（政経学部・法学部・経済学部・大学院社会科学研究科 同窓会）懇親会での挨拶の一部を加筆修正したものである。）

広島大学マネジメント学会 会長
盧　　濤
2024年初春 於広島大学東千田キャンパス